# 恋と噂

## ――万葉歌の「人言」を考える――

新谷正雄

### 一　はじめに

万葉集中「人目・人言」の語を一首の中に読み込む歌は多い。それは恋歌に集中しており、人目は二三首、人言は三〇首に見られる。[1] また人目・人言は、他の上代文献には見られず、歌の世界だけの特殊な言葉、歌言葉と考えられる。その理解は万葉恋歌の理解を一層深めることになるだろう。

人目・人言とは恋人達に対し向けられた他人の眼差しであり噂の謂である。歌表現に見られる恋人達を取り巻く「周囲の人々の態度」は、狭い村落社会の在り様と共に考えられてきた。そこから当時の社会生活までもが論じられてきたのである。その典型は家父長権とからめてとらえた西郷信綱「萬葉の相聞」[2]であろう。歌表現を実態にそのまま横滑りさせてとらえた、この西郷論のような極端な態度は見られなくなったものの、一部にはともすると歌の中の言葉としてではなく、実態を映した言葉とする理解と未分化のまま、この言葉が論じられて来ているように思われる。歌の言葉は直接に実態に還元できるものではない。表現から考えられることは、当時の人々の表現を生み出す基となった観念だけである。

人目・人言を観念の側、神婚幻想から説いたのは古橋信孝である。[3] 恋人達は神の通婚に倣い、人の目につかないように、人の噂に上らないように行動し、他人に知られた場合、その恋は破綻するというのである。そしてそのような理解の中で、多田一臣は人目・人言と言う時の「人」の聖・俗の二面性を説いた。[4] また古橋信孝は、共同体に対する個別の側も、個別的なものでありつつ共同体的なものであるという二重性を持つと論じた。つまり共同体から逸脱しようとする個別の側の表現である人目・人言も、共同幻想としてとらえられるというのである。[5] 森朝男はこの神婚幻想を更に展開させ、神の位置に天皇を置き、女は全て天皇の妻であるとする「宮廷」の論理から、人目・人言に見るタブーの論理を説明している。このタブーを歌うことが、即ち天皇への讃歌につながる、というものである。[6]

一方、斎藤英喜は神婚幻想という共同体内部の観念に対し、共同体外部の視点を導入し、歌垣、道という言葉から人目・人

言を読み解こうとした。[7]「人」が恋人でもあり、使いでもあり、第三者にもなるという指摘、また第三者の介在により自分達の恋の成熟を認識していく、といった指摘がなされている。

共同体、また宮廷をモデルとして提出されたこれらの論理は、それぞれが根拠を持つように見える。しかし人目・人言は結局は歌表現の中の言葉であり、古橋の言うように共同幻想としてとらえられるべきものであろう。とするならば、古橋論は「二重性」を指摘したところで終っているが、そこで言われた個別の側の共同幻想、個別の側が人目・人言と歌うことの内実を明かにしなければならない、という問題が残っているのではないか。その内実とは、言い換えれば、恋を禁忌とする共同体の側に対する恋人達の側の思いの共同性である。そしてその問題を明らめる中で、多田一臣の言う二面性も止揚できるのではないか、と考えている。本稿はそのような問題意識に立ち、改めて表現を読み直すところから人目・人言を考えようとしたものである。歌表現の分析という点に限っても、人目・人言の考察が十分になされて来たとは思われない。表現を詳細に見ていくことで、人目・人言論についての新しい展望が開けてくるように思うのである。尚、森論も万葉集の成立・意義とかかわって興味ある指摘と考えるが、本稿は歌表現に沿ってその意味を考えようとしたものである。

述べた共同体をモデルとした論と離れたところで、人目・人言をとらえようとした多田みや子の論にも触れておく。[8]そこでは「見る」と歌うことの考察から出発し、人の眼差しの中で我と汝は姿をとる、即ち表現となる、という。出発点は異なるものの斎藤論と似た指摘もあり、興味深いが、人目・人言を忌避する表現がどこから来るのか、という大きな問題が見失われているのではないか。やはり共同体モデルから離れたところで論を立てることは難しいように思われる。

ところで近年、中国少数民族文化の研究が進展している。[9]その中で、辰巳正明により見出された「歌垣」の中の「歌路」を参考として、人目・人言についての新見が飯田勇により出された。[10]歌路とは恋歌の道筋の意であり、人々は実際に「恋の状態」（以下、この言葉は男女が相思の恋愛状態にある、という意味で使われる）になる以前に、歌の掛け合いの中で歌路に沿い、恋の始めから終りまでを経験するという。そして万葉の恋歌はこの恋の状態に入る前に歌われるものであり、人目・人言の歌は恋の状態になることへの男女の躊躇を意味している、というのである。実際の歌の場における人目・人言の意味、歌の機能を考えようとする立場であり、歌をリアルなものとして把握しようとする姿勢がうかがえる。しかし同論では、多田みや子論でも指摘したと同様、人目・人言を忌避する表現がどこから来るのか、という点について説明しきれないように思われる。つまり人目・人言を躊躇と説明できても、躊躇からは人目・人言は出てこないと思われる。論理が歌の機能に傾き、表現から離れてしまっていると言わざるをえない。

尚、恋とは直接関係しない2・一七〇歌（島の宮勾の池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜かず）や3・四六〇歌（栲綱の　新羅の国ゆ　人言を　よしと聞かして……）に人目・人言の用例を見る。元もとは恋に特定された用語ではなかったのかも知れな

い。が、歌言葉に特化されていった歴史を思うべきであろう。用例が恋歌に偏っているところから、そのように考えられるのである。

これまで人目・人言と、両者を並べて述べてきたが、次節以下では人言、人の噂に問題を絞って考えてみたい。恋にかかわる噂の意味を考える本稿の立場からのものであるが、一方、人目・人言も述べたように、恋人達にとっての禁忌という基本的なところで同一の性格を持っており、人言を考えることが、人目を考えることにもつながると考える為である。

## 二　恋の噂

人言とは「他人の言葉。世間の噂」（岩波古語辞典）の意とされるが、述べたように恋にかかわる人々の噂としてとらえた方が万葉集の実態には合っている。ここではその意味について、更に検討を加えていく。まず比較の意味で、人言と歌うもの以外の、恋にかかわる噂の歌を見てみる。[11]

1 波のむたなびく玉藻の片思にわが思ふ人の言の繁けく
（12・三〇七八）

2 紀の海の名高の浦に寄する波音高きかも逢はぬ子ゆゑに
（11・二七三〇）

3 暫くも見ねば恋しみ吾妹子は日に日に来れば言の繁けく
（11・二三九七）

4 うつせみの八十言の上は繁くとも争ひかねて吾を言なすな
（14・三四五六）

1歌は片思いであり恋の状態にはないわけであるが、その中で思う異性に他の人との噂が激しく、心を痛めている。2歌は逢ってもいない娘子との間に、恋の状態にあるという噂が立っている、というのである。また3歌は暫く妹に逢わないと恋しいと歌い、作者と妹とは恋の状態にあり、その中で二人の間の恋の関係についての噂が立つことを憂いている。4歌の作者もまた恋の状態にあって、その相手が他人に自分達の恋を話してしまうことを恐れているのである。

本稿の見方からこのような恋の噂の分類を試みてみる。一つの分類は、作者と作者の思いの対象とが歌の中で恋の状態にあるのかどうか、ということである。1・2は共に恋の状態にはないと言えよう。3・4は共に恋の状態にあると言える。

もう一つの分類は噂の内容によるものである。具体的には第一の分類ともからむのであるが、噂の対象が、歌作者とその思う人の二人の、一方についての噂なのか、それとも両者に対する、即ち両者の関係の在り様についての、或いは恋の関係の有無についての噂なのかどうか、ということである。

1歌は恋の状態にある二人に対するものではなく、思いの対象一人についての噂と言うことができる。また2歌は実体はないものの、噂は二人に対する噂であり、3・4は実体があって、その上での二人に対する噂である。

それでは「人言」の歌はどうであろうか。全てを掲げることはできないが、次の例を見られたい。

5 垣穂なす人言聞きてわが背子が情たゆたひ逢はぬこのころ
（4・七一三）

6人言の繁き間守ると逢はずあらば終にや子らが面忘れなむ
（11・二五九一）

7人言を繁み言痛み吾妹子に去にし月よりいまだ逢はぬかも
（12・二八九五）

8ねもころに思ふ吾妹を人言の繁きによりてよどむ頃かも
（12・三一〇九）

9人言の繁くしあらば君もわれも絶えむといひて逢ひしものかも
（12・三一一〇）

まず作者とその思いの対象とが恋の状態にあるか否か、について検討を加える。5歌では「逢はぬこのころ」であり、逢わないのは人言の為で、二人は依然として恋の状態にあると考えられる。6歌は「逢はずあらば」、7歌は「去にし月より」とあり、共に恋の状態にあることが知られる。8・9は一対の問答歌であるが、問歌で「よどむ」答歌で「絶えむ……ものかも」と歌われており、逢えないでいるものの二人は恋の状態にある。

人言とは恋の状態にある場合に用いられるとしてよいと考えるが、例外となりそうな歌も見ておきたい。即ち次の歌である。

10人言は夏野の草の繁くとも妹とわれとし携はり寝ば
（10・一九八三）

11人言を繁みこちたみわが背子を目には見れども逢ふよしも無し
（12・二九三八）

10歌は作者と妹とが恋の状態にあるのかないのか、必ずしも明かとは言えない。更に「寝ば」の仮定の意味を重くとらえれば、今まで共寝をしたことがなく、更に現在恋の状態にはないことを背景とした言い方とも見られるからである。しかしこの歌も、今現在二人は恋の状態にあって既に噂が立っているが、共寝さえできたならばよいのだが、といった意味にとることは可能で、その理解の方が素直であろう。全集、釈注はまた別に、歌末「ば」を仮定条件の確定的用法としてとらえ、逢ったのだから後は噂が立っても構わない、ととらえている。この解釈は、二人が恋の状態にある場合に人言が使われるとする本稿の立場とは矛盾しないものである。11歌も二人の関係が恋の状態にあるかどうか明かではない。がしかしこれも逢会後、噂が立ち、その為に以後二人は逢うことができない、と恋の状態における人言を想定することが可能である。

まとめれば、人言が二人の恋の状態を前提としての人々の噂の意であることを確実に示す歌が一方にありながら、それを否定する例となる歌はないことが確認できる。人言により逢えないと歌うのは、単に噂だけがある、というのではなく、実体（表現内部での実体）として恋の関係があり、そこに立つ人々の噂と理解できるのである。

次に人言でなされる噂の内容、一人についての噂なのか、二人に対してのものなのかという点について、本稿の立場から確認しておきたい。人言の内容については、表現の中でそれを具体的に示しているものは殆どないと言ってよい。多く「人言繁し」と歌われているように、単に人言が激しいとするものが殆どである。これはやはり恋は人々の噂の対象となってはいけない、という観念からのみ説明が可能で、その噂の内容は二人が

恋の状態にあるというものであることは間違いないだろう。その為に恋をする男女は、5歌では「たゆたひ」、6歌では「逢はず」、7では「逢はぬ」状態にあり、8・9歌では「よどむ」のである。

作者とその思いの対象とが恋の状態にはない場合でありながら、「二人」の関係についての噂を歌ったものとして先に2歌を見たが、更に二例程見ておく。

12風吹かぬ浦に波立ちあらぬ名をわれは負へるか逢ふとはなしに　（11・二七二六）

13波の間ゆ雲居に見ゆる粟島の逢はぬものから吾に寄する児ら　（12・三一六七）

いずれも噂はあるが、しかしそれらは真実ではないものである。即ち12歌「あらぬ名」、13歌「逢はぬものから」とあり、共に真の二人の関係を反映した噂ではない。人言の歌では二人の関係が既に成立していたのだが、ここでは未だ成立していない。これらの歌と比較してみると、人言の歌とは、二人が恋の状態にある所に立つ、その二人の関係に対する噂の歌と理解され、人言とは特別な意味を担った言葉ととらえることができるのである。

このように考えた所で、この理解に対する反証となりそうな例を見ておく。次の二首である。

14人言の讒すを聞きて玉桙の道にも逢はじと言へりし吾妹　（12・二八七一）

15妹なろが使ふ川津のささら荻あしと人言語りよらしも　（14・三四四六）

14歌の「讒す」を、作者個人に対する中傷という意味にとらえることが可能かも知れない。つまり他の人言歌が二人の関係の存在についての噂であるところ、これは作者自身についての例えば他に恋人が居る、素行が悪い等の悪い噂であるというような、個人に対する噂ととらえられる可能性があるからである。しかしそれは可能性に止まり、ここも二人には関係があるとした上で、その関係は良くないと中傷している噂と見ることができると考える。そのような中傷に妹が困惑しているのである。

15歌は難しい歌だが、第四句「安志等比登其等」は、以下との続きで言えば「悪しと人言」ととらえておいてよいだろう。最近の注釈書も多くがこの見方をとる。このようにとる時、「悪し」と人の噂する対象が、二人の一方、歌作者の相手と理解されてしまうことは可能性としてはあるかも知れない。しかし14歌で述べたと同様、二人の関係を良くないものとする噂、関係の存在を悪い関係と表出した表現ととらえ、ここも人言の歌の例外とはならないと考えることはできよう。14・15歌共に、他の人言とは異った意味にとるべき積極的な理由は見出だせない。

以上述べ来ったところにより、人言とは、恋の状態にある二人に対する、関係の存在についての噂であるとしてよいと考える。

## 三　噂を噂

次に人言という言葉を誰が発しているかを確認するところか

ら論を進めてみたい。この点については、その全て例外無く恋人の側から発せられていると考えられる。それは既に掲げてきた人言の歌からでも確認できよう。人言の側である周囲の人々の口から、人言の言葉を聞くことは無いのである。また人言の歌は、相聞往来の巻である巻一一・一二を中心として、やはり歌が贈答された巻四などにその多くを見る。[12] とすればまた人言という言葉は、恋人達の内部で、恋人の一方から一方へと歌い掛けられた歌の中にあるということが知られるのである。

今述べたことは改めて確認するまでもないと思われるが、女が恋の状態にある男に対し、人言が激しく使を遣れないとして贈った次の歌を参考として掲げておく。

16人言を繁みと君に玉梓の使も遣らず忘るると思ふな
（11・二五八六）

更に、人言歌の内容は、16歌もそうであるが、先に触れたように大部分が「繁み」とか「言痛し」とかの言葉で人言が形容され、噂が激しいという意味が示されている。しかし噂がどのような噂であるかを歌の主題としていたり、或いは具体的に説明していたりしているものは少ない。先に掲げた14・15歌が二人の関係を良くないもの、としているくらいである。次の17歌では、初・二句の序詞が人言を説明している。

17松が浦に騒ぐ群立ちま人言思ほすなもろわが思ほのすも
（14・三五五二）

しかし序詞の意味は噂の激しさの譬喩であり、人言の内容を述べているということではない。

以上のように人言とは、言葉として一首の中に歌い込められはするものの、その具体的な内容は殆ど示されていないと見るべきものである。人言の内容が歌われていないとすると、人言の歌では何が歌われているのであろうか。一見、噂が激しいから逢えない、ということだけが歌われているように見えるわけだが、しかしそこに止まらず、更にそのように歌うことの意味、表現の意味を考えていきたい。

人言を歌う意味を考える際、重要な点はこの言葉が恋の状態にある二人の口から出ている、ということであると考える。人言は、恋人達の一方が一方に歌い掛けた歌表現の中にある。とすると殊更恋人達が噂を歌の中に読み込む理由はどこにあるのだろうか、という問題が出て来る。噂とは一般的に神の言葉ととらえられよう。先に触れた、多田一臣が人言とは聖でもあるし俗でもある二面性を持つ、と述べた聖である。しかし果たしてそれは聖でもあり俗でもあると見るべきものなのだろうか。この二面性の視点は恋人達も周囲の人々も共に視野の中に収めようとする、全体を俯瞰する見方のように思われる。ところが恋人達はそのような視点は持てないのではないか。飽くまで自分の位置からしか周囲を見られないはずだ。とすると、この人言はやはり俗の意味を持つとすべきではないか。そうであるからこそ、自分達を神の位置に持って行くことができるのである。周囲を俗と見ることにより自分達を神とし、自分達の行為を神婚に倣ったものとすることが可能となるのである。

このことは人言の「人」を考えるところからも導かれるように思われる。人とは神に対する言葉としてよいだろう。恋は神の所行である。恋の状態にある自分達は神の位置に置かなけれ

ばならず、一方、他人は神に対する俗である人とならなければならない。人言と歌うことは、自分達が神となっていることの宣言であり、周囲の人達とは区別、聖別（聖なるものとして他から区別）されてあることの宣言となるのである。

ここで少し方向を変えて考えてみる。人言とは周囲の人々の噂の意であった。しかしそれは直接には恋の状態にある二人の間でだけ使われる言葉であった。また人言とは恋人達が周囲へ眼差しを向ける中で発せられる言葉であった。とすると人言とは、やや唐突だが、二人の話の種、更に言えば噂ということにならないだろうか。わずか二人の間で噂とは語弊があるかも知れないが、ここでは噂話といった軽い意味で使っている。「周囲で我々のことを噂している」という噂話を二人がしている、と考えるのである。歌贈答の当事者以外には分らない、客観的には証明しようのない噂、あるかないか分らない話の種を弄びながら、二人の恋の関係を確認したり、熟させようとする等の意図から発せられたもの、ということにならないだろうか。述べたような人言の内容に具体性のないことがこの考え方を支えよう。先に掲げた5歌、6歌等、噂は実体としてある、と受け取られてしまいそうであるが、恋の状態にある二人の側の一方的な歌のみであり、噂が実体としてあるとする客観的な状況は何一つ確認できないのである。噂の話題は何でもよいのだろう。いや余り深刻でない方がよい。そこで論議を闘わそうというのではないのだから。難しい問題を取り上げ、意見が割れるなどして、二人の関係が危うくなっては元も子も無い。

しかしそれにしても何故人言なのかという問題は残ろう。軽い話題であれば何でもよい、というのであれば、人言が多く歌われることの説明がつかない。ここに話の種が「周囲の人々の噂」であることの重要性が浮び上って来る。

噂とは何なのだろうか。様々なとらえ方が可能であろうが、本稿の見方からすれば、噂は互いの感情の擦り合せと考える。[13] 個々人の感情は皆少しずつ異っている。狭い村落の共同社会においても、個的な思いを持つことにより個々に区別される個人は存在し、人々の間の感情のずれは必ず存在する。この感情のずれは小さいものであっても長い間には修復できない程に広がる危険がある。その為に常に感情の擦り合わせを行うのである。機能的な見方であるが、それが噂というものであろう。噂の対象となる問題の大小には関係なく、狭い社会程噂は常に行われていよう。[14]

また噂はある人物・集団を対象としてなされるわけであるが、その当事者（集団）は噂の輪の中には入れない。彼等の耳に入る場合はあるが、必ずその当事者（集団）を排除する形で噂が流れていく。更に言えば、噂の人物・集団の側の者と見られる人々もこの輪の中に入ることはできない。噂は、集団から排除された者達を対象として、親密な者同士（共同体）の間にしか交されないのである。となると噂は、噂を行う人達と噂の対象になる側の人達とを分けることになる。そして以上のことを逆に言い直しただけだが、噂は、噂する人々の親密度を高める働きを持つ。噂をすることにより一種の共同体を作ることになるのである。噂により世界は、噂をする側と、噂の対象となる人々・集団の側との二つに分けられることになる。

恋人達の間で言われる人言もこの種のものではないか。人言と歌うことで互いの噂の種を作り、互いの共同性を高めようとするものであった、と言えるのではないだろうか。しかも二人の噂の対象も、周囲の人々の噂、我々の噂をする人々のその噂ととらえており、世界を二つに分けようとするのに最も効果的な言葉だったと言えるように思われる。その為、人言により逢えないなどと歌われても、人言と言った時点で直ちに周囲と二人の間に境界線が引かれ、互いの恋の関係を前面に押出す働きをこの言葉は持ったのではないだろうか。或いは周囲の人々の悪意ある噂を仮想し、それに対抗し、恋人の一方が放つ異性を取り込む為の言葉とも言えるものであったと考えられるのである。

人言歌は周囲と聖別するところに意味を持つこと、又それは噂と同一視されることを述べた。人言を歌に詠み込むことにより、自ずと作者とその歌を贈る相手とが、周囲とは隔絶された中で恋の状態にあることが示されるのである。

## 四　二人の世界

噂の歌は単に周囲から自分達を聖別するところに意味があるのだろうか。先があるように思われる。古橋の言う個別の側の共同性の内実は更に突き詰められなければならない。

常陸国風土記に、万葉集に異伝歌（後掲21歌）を持つ次の歌謡がある。

18言痛けば小泊瀬山の石城にも率て籠らなむな恋ひそ我妹（風・一）

人言とは歌われていないものの、ここには「言痛けば」とあり、人言と歌う意味を考える本稿にとり、参考にしたい歌である。

ここには掲げなかった地の文との関係には間然としたところがあり、その点からは歌意を明瞭であるという訳にはいかない。が、この歌だけでその意味をとらえれば、噂が激しいので小泊瀬山の石城にでも隠ろう、吾が妹よ、といった程の意味である。石城とはここでは墳墓の地である大和の泊瀬とも併せ、墓を意味しているととらえられる。とするとここは周囲の噂の為に共に死のうという意味にとることができる。隠りを死ととらえられることは、次の挽歌によっても確かめられる。

19　河内王を豊前国の鏡山に葬りし時に、手持女王の作れる歌三首（内一首）

豊国の鏡山の石戸立て隠りにけらし待てど来まさず（3・四一八）

ここでは人の死について、墳墓の地に隠ると歌っている。[15] 18歌について、或いは生物的・自然的な死まで考えなくともよいのかも知れない。石城即ち、周囲から遮断された場所に二人で身を置きたいという意味にとり、そこから社会的な死、周囲との関係を断つことの謂ととることもできよう。いずれにしても人言により逢えないという先には死があるのではないか、ということが考えられる。

前節では、人言と歌うことが世界を我々の側、聖なる恋人の側と、周囲の俗なる人々の側とに分けることを述べた、とする

と噂を歌うことは周囲から隔絶されてあることを歌うことであり、それはとりもなおさず今述べた社会的な死を意味することにつながる、と考えられるのではないか。それをこの歌が証しているように思われる。

ある共同体における死である。が、しかしそれは単純な死ではない。周囲から隔絶されての死であるからである。つまり共同体内部での死、一つの共同体を一つの世界とすれば、それはこの世界での死であり、他の世界では生きているということが考えられるからである。或いはこの場合、他の世界で生きる為にこの世界で死ぬのだ、と言った方がよいのかも知れない。

つまりこの世界では結ばれないが、別の世界、二人だけの世界で結ばれることを願う表現なのではないだろうか、ということである。次の歌を見られたい。

20　大伴宿禰家持の坂上家の大嬢に贈れる二首［離り絶ゆることあまた年にして、復会ひて相聞往来せり］（内一首）

人も無き国もあらぬか吾妹子と携ひ行きて副ひてをらむ

（4・七二八）

題詞脚注にあるように、家持が一旦断絶した大嬢とのかつての関係を、復活させようとした時の歌である。ここで言われている、人が居ない国に行きそこで一緒に住みたい、とはどの様な意味だろうか。それは、述べてきたこの世界での死を意味し、又別の世界での生を意味しているのではないだろうか。二人だけの世界を持ち、そこで結ばれたいということと考えられるのである。

更に、他人が居ない国に行くのに、吾妹子と共に行くとは、大胡太郎「復会と歌」[16]が論じたように、そこに兄妹婚幻想[17]を考えるべきではないだろうか。時代は異るが『今昔物語』巻二六第一〇「土佐国の妹兄、知らざる島に行き住みし語」に拠りながら、この点について述べてみたい。そこでは、船の中で寝ていた兄妹が風に流され、遙か沖にある無人島に流れ着いた、という話が語られている。そして二人はそこで生活を始め、年頃になり結婚し子を産み、更にその子供が次々に子を産んで子孫が繁栄したというのである。両親にとり、二人の兄妹を失ったことは死に等しいものであろう。しかし見方を変え、兄妹の子孫の側から見れば、二人は他の世界からやって来た始祖と見るべきものであろう。二人の兄妹が新たな一つの世界を作り子を産んでいったのである。船が流されたことは物語世界の中で死、社会的な死を意味していよう。世界或いは生の場を二つに分けているのである。空間的な「世界」という言い方を時間的な言い方に改めれば、それは前世と今世、或いは現世と来世との関係と言えよう。[18]兄妹が親の元にあった時が前世であり、島に流れ着いてからの二人の生活が今世である。前世の死は今世の生ということになる。

二人の兄妹の結婚が神話として語られれば、二人は別の世界・前世からやって来た祖先神ということになろう。述べた世界・生の在り様は記の岐美二神の国造りに重ねることができる。他の世界・前世で死んだ岐美二神が、この世界・今世に現れて結婚し国を作った、と見ることが可能だからある。二神が兄妹であることは西郷信綱により論じられている。[19]つまり18歌で二人で共に死のうと歌うこと、また家持が20歌で人の居ない

国に行こうと歌うことは、兄妹婚幻想を踏まえた、二人を始祖神とする新たな世界を築こうとする意味と考えられるのである。

社会的な死ということを述べて来ているが、次に18歌に対する万葉集の異伝歌に沿いながら、別の角度からこの点について補足しておきたい。一首は次の通りである。

21事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひわが背
（16・三八〇六）

右は伝へて云はく「時に女子ありき。父母に知れずて竊かに壮士に接ひき。壮士その親の呵嘖はむことを悚惕りて稍に猶予ふ意あり。これに因りて娘子のこの歌を裁作りてその夫に贈り与へき」といへり。

左注によれば、恋愛或いは結婚を躊躇する男に女が決断を迫ったものと思しい。決断の内容は歌表現に「共に」とあるところから、別れることではなく、一緒に居る方向でのものであったことは間違い無い。そしてそのような歌の中で隠りが歌われていることの意味である。歌理解の一つは、19歌の隠りの意味に基づいた生物的な意味での死ということになろう。そこに隠って共に死のうというのである。心中というと日本文学においては殆ど近世から、ということになるが、上代においては記における軽太子・軽大郎女の同母兄妹の心中がある。また同じく同母兄妹の沙本比古・沙本比売も、同じ稲城の中に入ったまま共に死ぬわけで、これも心中としてよいだろう。この21歌に心中を考えることは許されよう。

しかし一方、女が心中を仄めかしつつ男に結婚の決断、周囲に関係を明かにすることを迫ったもの、という理解もできるだろう。この理解は、隠りを社会的な死とする見方に即かせることになる。石城に隠った後に、そこから二人が今まで生活していた社会に戻ったとしてもよいのである。但しその際、その社会を二人は全く新しい眼差しで見ることになる。二人が周囲に対し、それまでとは異った関係をとるということである。それは隠ることにより、社会と隔絶された二人だけの世界、周囲の世界とは異った世界を二人が作った為である。言わばそれは社会的な死の後の再生ということになろう。隠りが再生をも含意したことは「母が養ふ蚕の繭隠り」（11・二四九五歌他）という言葉によっても確かめられる。蚕は成虫になる為に繭に隠るのである。女は、周囲の圧力に負けそうな男に対し、決断のできる強い人間に生れ変ってもらいたかった、だから再生の為の隠りを勧めた、ともとれる。成功すれば周囲との関係を新しい形で形成する、即ち新しい二人の人生を切り開いていくことができるからである。本稿の見方からは、以上のようにこの21歌を解釈することができるのである。

やや遠回りしたが、ここで漸く結論に辿り着いたように思われる。人言とはこの二人の世界を作ろうとする意図により発せられた言葉であった、とすべきではないだろうか。周囲と隔絶された二人だけの世界である。歌の作者一人一人が直接に死、社会的な死までを考えて人言を歌に詠み込んだというわけではなくても、歌の言葉としてはそこまでを含んだ言葉であり、その為に強い力を持ったと見られるのである。その力は、逢えないと歌われる内容にもかかわらず、その表現を直ちに恋表現と

し、更に詠み掛ける相手を自分の側・歌作者の側に囲い込んでしまうものだったのである。

## 五　おわりに

人言が恋人達に向けられた周囲の人々の噂の意として使われ、また恋をする二人の一方から一方への言葉として発せられていることを確認した。そしてそこから人言の歌の背後に存在した観念と、それが恋歌となる所以について述べ来った。やや抽象的な論理に傾いたが、歌言葉としての人言はこのような形でとらえられるべきものと考える。

人言を読み込む歌が実際に歌われる場面は様々であったろう。それは思いの相手を絡めとろうという意図で歌われたり、単なる起居相問の歌として歌われたり、普段義理を欠いている相手に謝る意味で歌われ等したであろう。いずれにしても相聞の歌に多用されたのは、二人が恋の状態にあることを際立たせることになる「人言」が、歌を贈る相手に向かう作者の心を確実に担いえた為である。しかし現実の歌贈答の場を考えることは考察の範囲外となる。本稿は飽くまで表現に関わって考察を加えてみたものである。

注(1)　数字は訓みにより振れる。人目では11・二七六七歌（数字の外）、人言では14・三四四六歌（数字の内・本文15歌）で理解が分れている。

(2)　平凡社『萬葉集大成　第五巻』昭和二九年一二月

(3)　NHKブックス『万葉集を読みなおす　神謡から〝うたへ〟』昭和六〇年一月。講談社学術文庫『万葉歌の成立』平成五年二月。

(4)　「隠り妻と人妻と」（明治書院『万葉歌の表現』平成三年七月）

(5)　注3に同じ。

(6)　「恋と宮廷」（『まひる野』平成八年三月）

(7)　「恋と人言―万葉相聞歌の一側面として」（『語文』第七五輯　平成元年一二月）。「人目・人言と歌垣―万葉相聞歌論のために」（翰林書房『森淳司博士古稀記念論集　萬葉の課題』平成七年二月）。「恋のトポスとしての『道』―『古今相聞往来歌』をめぐって」（雄山閣出版『万葉集相聞の世界　恋ひて死ぬとも』平成九年八月）。

(8)　「万葉集・恋歌における『人』の意味」（『上代文学』第七六号　平成八年四月）

(9)　工藤隆『歌垣と神話をさかのぼる～少数民族文化としての日本古代文学～』（新典社　平成一一年七月）、辰巳正明『詩の起源　東アジア文化圏の恋愛詩』（笠間書院　平成一二年五月）等。

(10)　「万葉恋歌の常識を疑う―『万葉集』巻二〇・四四五五～六の贈答歌を読む―」（『日本文学』第四八巻第一〇号　平成一一年一〇月）

(11)　万葉集からの引用は、中西進・講談社文庫『万葉集全訳注』による。また風土記歌謡は土橋寛・岩波大系『古代歌謡集』によった。

(12)　「はじめに」で触れた3・四六〇歌を例外として除き、3・四三六歌は挽歌であるが、死者生前の相聞のやり取り

が挽歌と共にここに収録されていると考える。

(13) ジャン＝ノエル・カプフェレ『うわさ』(法政大学出版局『うわさ［増補版］もっとも古いメディア』古田幸男訳平成五年九月)は「うわさは、情緒を含むコミュニケーションである」と述べている。賛意を表したい。

(14) 多田一臣注4論は、人言について「共同体の内部を浮遊する言説」としている。

(15) 本稿の拠った中西『全訳注』の他、塙本等、多くがここの原文「隠」をコモリと訓んでいる。一方、新編全集等はこれをカクリとしている。記の「天照大御神、見畏み、天の石屋の戸を開きて、刺しこもり(＝許母理)坐しき」という記述、また次の四一九歌の「石戸破る」との整合性から、本稿はコモリの訓がよいと考える。

(16) 副題「大伴家持・坂上大嬢の相聞往来歌を通して」(『セミナー古代文学'85家持の歌を〈読む〉』昭和六一年七月)

(17) 兄妹婚については古橋信孝「兄妹婚の伝承」(『ぺりかん社『神話・物語の文芸史』平成四年四月　初出：武蔵野書院『シリーズ古代の文学5』昭和五五年二月)を参照。

(18) 固よりここで言う「世」は仏教のそれとは異る。

(19) 「近親相姦と神話―イザナキ・イザナミのこと―」(未来社『古事記研究』昭和四八年七月　初出：『展望』昭和四五年七月)

(しんたに　まさお)